

# 新たな沖縄振興計画への提言 ～沖縄の長寿復活と医療系の成長戦略～

平成 23 年 4 月

沖縄県医師会長 宮城信雄

## 地域活性化と長寿復活プラン

### 長寿復活と 地域活性化

#### 学校活用プラン

子供がつくる弁当の日、学校における栄養士による料理教室、授業の中での沖縄の伝統食文化、食材・料理方法を教える、料理教室、親子、学校と地域が一帯となった活動、長期的視野に立った健康教育モデル校の設置

#### 地域活性化プラン(イベント)

生き甲斐造り、高齢者の役割をつくる。余暇設計、余暇教育、エイサーなど祭りを造る、運動会、市民マラソン、ウォーキング大会、バレー大会、職場における健康づくり、芸能サークル、世代をこえ、地域を連携した取り組み、都市部における区長などを活用した地域力の強化

#### 地域活性化プラン(施設)

道路行政に健康増進や街作りの概念を取り込む、散歩のできる街作り、地域コミュニティーセンター、ショッピングモール、コンビニを活用してその周囲に朝市、夕市の開催、デイサービス、学童保育、保育園、運動場、体育館、都市に負けない学習塾、地方でも教育ができる環境整備、診療所併設など

#### 少子化対策

周産期医療の充実、安心して出産子育てができる環境整備、保育相談、保育所、母親が安心して働ける環境づくり

#### 北部地域活性化プラン

JICA 沖縄国際センターと連携し名桜大学に国際支援学科の設置、大学と連携し地域活性化プラン策定、アジアの難民を受け入れて共同事業をおこなう、国際的な町づくりをする

## 沖縄メディカルアイランド構想



## 沖縄の長寿復活と医療系の成長戦略を提言

我が国は、かつて世界のどの国も経験したことがない超高齢社会を迎える。世界各国が我が国の今後の動向に注目している。その中にあって、かつて世界に長寿地域として名を馳せた本県が「健康長寿復活」を図り、世界のモデル地区としての地位を確立する。

本県に古来からある「文化・食・コミュニティー」の良さを改めて見つめ直し、高齢者が生き甲斐を持ち健康的で安心して生活ができると共に、運動と食事を幼い頃より意識づけ、地域が一体となった疎外感のない社会づくりをめざす必要がある。

従来型の事業ではなく、世代を超えて、地域の連携を図る中から長寿復活と地域の活性化を求める。

また一方で自立型沖縄経済を医療の分野から発展させていくことも大切だと考え以下のような提言を行なう。

I : 地域を活性化し長寿を復活させる

II : 医療を通じた沖縄県の成長戦略を押し進める

I : 地域活性化と長寿復活プラン

1、少子化対策

産婦人科医師の確保と周産期医療を充実させ安心して出産、子育てができる環境整備、保育相談、保育所、母親が安心して働く環境づくりをする。

2、学校活用プラン

学校と親子が一体となった活動をつくる。子供がつくる弁当の日を推進する。弁当を子供が作る事により食材の大切さ、母親とのコミュニケーション、買い物することによる社会との関わり、感謝の気持ちが芽生える。学校における栄養士による料理教室、授業の中で沖縄の伝統食文化、食材・料理方法を教える料理教室。親子、学校と地域が一帯となった活動、長期的視野に立った健康教育モデル校の設置

### **3、地域活性化プラン（施設）**

道路行政などに健康増進や街作りの概念を取り込み散歩のできる街作り、地域コミュニティーセンター、ショッピングモール、コンビニなどを活用してその周囲に朝市や夕市を開催したり、デイサービスや学童保育、保育園、運動場、体育館、診療所などを集積することにより地域活性化の中心部分を形成する。そこへ人々が集う事により子供からお年寄りまで一緒に過ごせる環境が形成され人のにぎわいをつくることができる。地方においても都市に負けない学習塾や教育ができる環境を整備し都市への人の集中を回避できる環境をつくる。

### **4、地域活性化プラン（イベント）**

集団に属して活動する基盤づくり、高齢者も若者も集える環境をつくることにより孤独な環境をなくし元気で長寿の社会をつくる事ができる。

生き甲斐造りのために高齢者のための役割をつくり積極的に高齢者の活用につとめる。余暇設計、余暇教育や高齢者向け仕事を発掘する。エイサー大会や祭りを創設し子供から大人、高齢者が一緒にイベントを作り上げる様にする。運動会、市民マラソン、ウォーキング大会、バレー大会、職場における健康づくり、芸能サークル、世代をこえ、地域を連携した取り組みをする。

都市部における区長制度などを活用し住民の健康、検診への勧誘、地域活動の中心メンバーを育成し地域力の強化につとめる。

沖縄の伝統文化の育成、鉄軌道を導入し、各駅からオフィス街、住宅地への歩行者道路整備(街路樹・噴水等)し歩く環境を整備する。道に歩行距離の道標をつくり歩行距離確認し運動を継続できる環境を整備する。オフィス街の歩行者道路が整備されると、昼休み時間や、残業前の30分程度運動しリフレッシュして仕事に励むことができる。

退職した方々が農作物を栽培しそれを学校給食に使用するシステムづくり。生徒の農業体験、年数回生産者を招いて生徒と合同給食会を行う。

### **5、北部など過疎地域の活性化プラン**

北部を中心に提言をする。北部において名桜大学を活用する事により地域の活性化がはかられると考える。

JICA 沖縄国際センターと連携し名桜大学に国際支援学科を設置し海外の支援をしたい方々の外国語教育、指導、支援国情報集積と活用、外国人留学生を受け入れ支援のあり方、方法等を研究実践する。名桜大学と連携し地域活性化プラン策定、北部コミュニティの活性化、健康長寿復活プランの策定などを研究する。

アジアの難民を受け入れて北部地区で共同事業をおこない国際的な町づくりをする。北部で出生した子供には日本国籍が取得できる様にするなどの優遇措置を考慮する。

## Ⅱ : 医療を通じた沖縄県の成長戦略(沖縄メディカルアイランド構想)

### 万国医療津梁をつくる

沖縄県は資源が乏しく製造業の活性化はそれほど大きく見込めないので、多くの人々の懸け橋となる万国津梁を中心とした沖縄県の発展を考える。多くの人々が沖縄を経由して行き交うことで沖縄県の未来が開けると考える。沖縄は従来外国人を受け入れる事にそれほど違和感のない県民性が培われている。また医療の分野では医師の研修に関して全国でも有数の研修医数を誇っている。これら研修医を専門医へ育てる事、また海外から研修生を受け入れることにより、沖縄の医療を充実発展させ、また海外への医療技術援助ができる可能性を秘めている。

平成24年度より医療のクリニカルシミュレーションセンターがオープンする。これらを活用しシミュレーター教育の充実とシミュレータ一産業の活性化など多くの事が考えられる。

万国医療津梁をもとに沖縄メディカルアイランド構想を提言する。

#### 1. 先端医療技術

重粒子線治療を沖縄で行なえる様にするとともに重粒子線の研究開発を勧める組織作りをする。医療特区を申請しその内では重粒子線を海外へ販売するために、外国人医師が沖縄でその国の患者さんを治療できるようにし、同時に研究開発もできるようにして、開発企業、周辺産業を支える企業に対し税制優遇措置をはかる。

クリニカルシミュレーションセンターのシミュレーターを開発する企業体を形成する。沖縄開発のシミュレーターを造るために内外の

企業を誘致し産業を発展させる。外国の研修生を呼び込み外国にシミュレーション教育を普及させる国際医療研修センターをつくる。

県内で行なわれている、肝硬変の再生、癌のリンパ球療法、関節再生医療等の再生医療を研究、発展させる体制を整備する。

## 2. 国際医療人材育成センター

先端医療技術、国際共同治験、国際医療機器開発などや遺伝子解析のできる最先端のギガシーケンサーを利用した共同研究、開発をするための核となる施設が必要になる。琉球大学や大学院大学。国内外の大学、研究センターなどと連携しこれらを解決するための施設が国際医療人材育成センターである。

平成24年度から始まるシミュレーションセンターを中心として、その周辺に国内外の先端医療機器メーカー、シミュレーターのプログラム開発をするIT企業、再生医療などの革新的医療技術の研修センターを誘致、集積し研究開発の国際センターとする。

これらを勧めるための税制優遇措置、研究開発された医療機器や医薬品の治験を促進するための組織の充実も必要になる。

重粒子線治療が可能になる場合には重粒子治療の海外への促進拠点、人材育成の拠点としての機能も賦与される。

## 3. 国際医療機器展示場（メディカルエキスポ）

最先端の医療機器の常設展示場を設ける。放射線機器等の世界的なメーカー（GE, フィリップス、シーメンス、東芝、日立など）に展示場を賃貸し、最先端の医療機器を展示して国内、海外の医療者に紹介する施設を創設する。検査する被験者は沖縄県から募集し治験費用などで募る。北方の国々からは沖縄の冬場の観光をかねた商談を成立させる。沖縄県は場所を提供するだけでよい。国際学会の誘致とメディカルエキスポの連携をおこない、コンベンション機能の充実と沖縄観光の発展をはかる。

## 4. 国際共同治験センター

韓国は製薬メーカーがないので世界の新薬の治験（試験）を取り入れて発展させることを国策としている。新薬の安全性効果を試験する。患者一人当たり、病院と資料作成するコーディネーターに資金が払われ、患者にも毎回の診察に資金が支払われ、検査、治療費がすべて無料になる。癌治療の新薬の治験などが行なわれる場合には治療手段を失った患者にとっては新薬の治験は朗報となる。県外の人も沖縄に来て治験を受ける事ができるし、ないしは沖縄と連携する県外の医療機関で治験を受ける事ができる。治験を促進

する事により医療の質が向上し県内の患者にとり最先端の医療を享受できる可能性がある。

また上記の先端医療で開発される医療技術の治験も必要になってくる。沖縄で最先端の医療を推進する重要な手段である。

## 5. メディカルツーリズム

重粒子線治療や再生医療が軌道に乗ると海外からの問い合わせが多くなり、先端医療を提供する必要が生ずる。国際医療人材育成センターと共同しながら、これらに対応した人材育成が必要になる。沖縄県が現在すすめている医療ツーリズムと周辺産業の形成、育成と連動することになる。

## 6. 國際貢献

東日本大震災に見られる様に災害医療を支える部署が必要である。沖縄県がすすめようとしている国際災害医療支援センター設置と同様に考えている。沖縄県に国際災害支援センターを設置し緊急時は沖縄県に集積された物資を利用し県外の医療団が沖縄経由で派遣される事になる。またこれらの施設の一部は台風時の観光客の宿泊場所として提供されたりしてもよいと考える。災害救助病院船の構想も考える。これらは通常は沖縄県の離島医療を支える機能を有し離島診療をなうことも考える。災害発生時には沖縄県の医療団を中心にして派遣が可能となる様な組織作りが必要である。